

かがわの中山間地域で

半農半Xの暮らし 事例集





半農半Xについて	2
----------------	---

— 県内の事例 —

事例① 半農半カフェ	4
-------------------------	---

(東かがわ市五名 大隅知岳さん)

事例② 半農半漁	6
-----------------------	---

(土庄町豊島 田村信子さん)

事例③ 半農半農家民宿	8
--------------------------	---

(丸亀市広島町 唐崎翔太さん)

事例④ 半農半職人	10
------------------------	----

(まんのう町勝浦 寺田真也さん)

事例⑤ 半農半カレー屋	12
--------------------------	----

(三豊市財田町 永井博之さん)

半農半Xについて

半農半Xとは・・・

農業 と ほかの様々な仕事 を組み合わせた新しいライフスタイル

のことを指します。

具体的な例を挙げると、半自給的な農業などの持続可能な小さな農ある暮らし（「農」）をベースに、自分のやりたいこと・好きなこと（「X」）を両立することで生計を立てていくライフスタイルがこれにあたります。

このようなライフスタイルは、サラリーマンや専業農家に比べると収入は少なくなることもありますが、その分、自分の個性や長所を活かし、やりたいことをしながら自分のペースで生活することができます。

そのため、「ただ生活費を稼ぐだけの生き方ではなく、やりたいことをしながら心豊かな生活がしたい」という方から共感を集めています。

（半農半Xのイメージ）



農ある暮らし

+



やりたいこと・好きなこと

半農半Xをはじめるときっかけの例

都会で残業続きの時間に追われる生活に疲れた…



収入はそこそこいいので、農村に移住して、できる範囲で自給自足しながら自分のペースで得意なことに集中したい！



なお、「X」にあたる部分は人それぞれです。また、1日の労働時間の半分が「農」である必要はなく、1日のほんの一部でもかまいません。栽培方法や面積も特に決まりのない、自由なスタイルです。

※似ていると思われる言葉に「兼業農家」がありますが、「兼業農家」の定義は、農林業センサスにおいて「世帯員のなかに兼業従事者（1年間に30日以上他に雇用されて仕事に従事した者または農業以外の自営業に従事した者）が1人以上いる農家」とされています。

半農半Xの例

- 昼間は農作業をし、夕方以降、別の仕事をする



- 主に自分のやりたいことをしながら、自分や家族が食べる分を畑で作る

主に自分のやりたいこと



家族で食べる分は自給



香川県の中山間地域（農村地域）で求められているもの

本県における令和2年の高齢化率（65歳以上の割合）は、農業従事者で57.3%、基幹的農業従事者で81.7%となっています。中でも、中山間地域での高齢化はさらに深刻で、同時に過疎化も進んでいる状況です。

そこで、中山間地域では、地域活性化を図るため、認定農業者などの専業農家だけでなく、この「半農半X」をはじめとする多様なライフスタイルを提案することで、幅広い世代の方に移住・定住していただくことを促す必要が出てきています。

農業の担い手だけでは、集落を維持するのに限界がある…



まずは少しでも若い人が来てくれれば、ほかの人も移住しやすい雰囲気ができるかもしれない

下記に該当する方は、次ページ以降で紹介する5名の方々の事例を参考に、「半農半X」の実践を検討してみたいかでしょうか。

農村暮らしに憧れている方

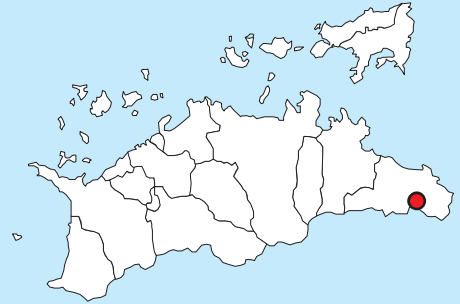
農村で自給自足的な生活をしながら自分の好きなことを職業にして生きたい方

農業をやりたいと思っているが、いきなり農業一本で生計を立てる自信がない方

五名の自然に囲まれて 家族そろって、豊かな食をゆったり楽しむ

東かがわ市五名

「のうさぎカフェ」 大隅知岳さん
(農林業+週末カフェ)



東かがわ市入野山で平成22年、「のうさぎカフェ」をオープン。現在は五名地区に移住し、農林業を行う大隅さんにお話を伺いました。

Q 現在のライフスタイルを教えてください。

A 金土日の週末はカフェを営業、平日は林業や農業の仕事をしています。メインは林業で、農業は他の仕事の合間に自家消費の野菜を育てたり、雑草を刈ったりする程度です。

林業の概要を説明しますと、冬のシーズンに雑木林を伐採し、春先からは薪割をして、夏になると植林されたヒノキなどの下草刈りを行います。クヌギやコナラは切りそろえ、燃料として販売したり、炭を作ったりします。林業はグループで仕事を行い、メンバーそれぞれの都合に合わせて仕事ができるので、助かっています。



大隅さん

Q 五名に移住しようと思ったきっかけは？

A 父親の実家が五名にあり、実家の隣の空き家を譲っていただき、家族でカフェをしようという話になりました。以前、私は飲食業の仕事に就いていましたので、その経験を生かせるし、また食材が豊富にあるので、食べ物を扱う仕事が良いのではと家族で話し合いました。最初は香川県なのでうどん店も候補に上がりましたが、山奥での営業は難しいとの結論で、最終的にカフェを選択しました。

当初は同じ東かがわ市の海辺にある白鳥から通っていましたが、やはり通勤は大変で、五名で住居用の良い物件を紹介してもらい、引っ越しをして住むようになりました。

Q 農林業の経験はありましたか？

A 子どもの頃から農作業の手伝いをしていましたので、農業は見よう見まねでできましたが、林業は全く経験がありませんでした。山で暮らすなら自分の手で木を切りたいと思い、移住をきっかけに林業を学ぶことにしました。そこで、林業などを手掛ける「五名里山を守る会」に押しかけて、一から林業を教えてもらいました。最初



「のうさぎカフェ」

は切った木の枝を払ったり、枝を運ぶことから始め、徐々に伐採もするようになりました。さらに、4年前には狩猟免許を取得しました。

農業、林業、有害鳥獣駆除を分けて考えることはできません。山間地で農業を行えば、必ずイノシシやシカ、サルなどの被害に遭います。その被害を軽減するには、里山の整備が必要です。田畑周辺の山や林に手を入れることで、動物が農地に近づきにくくなるからです。まだ狩猟の成果はあまり上がっていませんが、解体処理はマスターしました。時には、解体したイノシシやシカの肉を使って、バーベキューで食べるなどして楽しんでいきます。

Q 以前と比べて、現在の農村暮らしの良いところは？

A 今の暮らしには自分の時間を自分で管理できる良さがあります。野菜や肉を自給自足できるため、以前より食費がかからなくなったので、収入を得ることに多くの時間を費やす必要がなくなりました。豊かな実りを実感しています。

雇われていた頃は食生活が不規則になりがちで、食事はサッと終わらせるという毎日でした。ここに来てからは、家族で季節を感じながらゆっくりおいしいものを味わうことができるようになりました。



イノシシ肉のバーベキュー

Q 農業のここがいい！と思うところや、逆にきついと思うところは？

A 体を動かすのは好きなので、山の中の作業はやっていて気持ちが良いです。小鳥の声を聞きながら自然の中で労働するのは心身共に爽快で、大変さはあまり感じていません。



農作業をする大隅さん

Q 改めて「半農半X」のライフスタイルの良さと、今後チャレンジしたいことがあれば教えてください。

A 現在、ニホンミツバチの巣箱を作っています。自分たちでハチミツを採取することにチャレンジするつもりです。これで、さらに食の世界が広がるでしょう。

広がると言えば、迷いネコの世話をしているうちに、現在は同居のネコが10匹に増えてしまいました。ニワトリも5羽飼っています。

自然に囲まれて、家族や生き物たちと、ゆったりと暮らす今の生き方に満足しています。また、「半農半X」ならば、コロナ禍などでカフェの営業に不安を覚えたとしても、食べることには困りません。暮らしの土台がしっかりとしたように思います。



カフェスイーツ



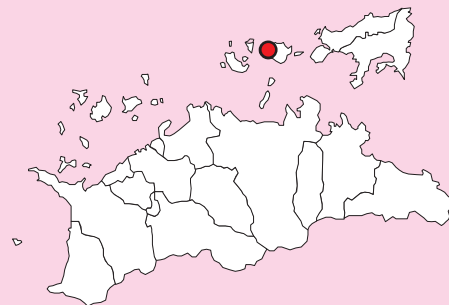
「のうさぎカフェ」外観

アートな島の夫婦二人、“人もうけ”で心豊かな第二の人生

土庄町豊島

農林漁家民宿「田村さん家」 田村吉輝さん
信子さん

(農業＋漁業＋民宿＋カフェ)



土庄町豊島で農林漁家民宿「田村さん家」と「カフェ甘香」を営む田村さんご夫妻にお話を伺いました。

Q 現在のライフスタイルを教えてください。

A 吉輝さん 現在は、週末を中心に農林漁家民宿「田村さん家」を経営し、金土日月の14時から17時頃まで「カフェ甘香」を営業しています。カフェや宿で提供する果物や野菜の多くは、夫婦で育てています。畑は自宅から少し離れた山際にあり、イノシシの被害と闘いながら収穫しています。また、漁協の准組合員になり、小さな漁船で週2回ほど漁にも出ます。

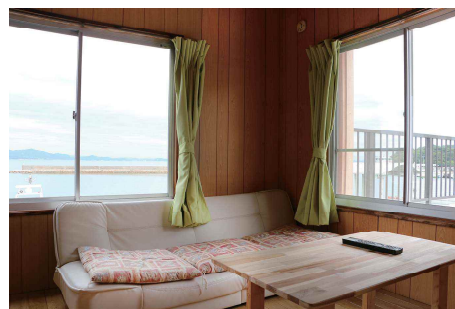


田村さんご夫妻

Q 豊島で民宿を開くようになったいきさつは？

A 吉輝さん 豊島で生まれ育ち、中学を卒業後は岡山県の玉野に出て造船を学んだ後、18歳で島に帰り、24歳で鉄工所を立ち上げました。鉄工所時代は島外の仕事を多く受けていたので、あちこちを飛び回る忙しい毎日でした。それも年を取るにつれ、大変さを感じていました。そんな時に、島で瀬戸内国際芸術祭が開催されるようになって、食プロジェクトが立ち上がり、農家民泊をしないかという募集がありました。そこで、平成22年に思い切って開業しました。開業当時はまだ鉄工所も続けており、妻もイチゴ栽培に手をとられていたので、宿泊は素泊まりのみの対応でした。

信子さん 岡山県から嫁いできて3人の子どものために恵まれ、子どもの将来も考えて、農業用ハウスを建てイチゴ栽培を手掛けるようになりましたが、イチゴ栽培は手間がかかるので、収穫時期のみならず、常に忙しい日々を過ごしていました。主人が宿を開業してからは、出荷できないイチゴでジャムなどを作る工房を作り、宿泊してくださったお客さまにジャムづくりなども体験してもらいました。農業の経営の難しさも知ったので、落ち着いた頃にイチゴハウスを島に移住してきた若い方に譲り、それからは宿を手伝うようになりました。



港が見える「田村さん家」

吉輝さん 宿泊者の方から食事を出してほしいという要望が多くあったので、まず「カフェ甘香」をスタートさせ、飲食業の免許を取得しました。令和2年に妻がイチゴ栽培をやめ

てからは、本格的に食事も提供できるようになり、今では新鮮な海の幸や山の幸で、おもてなしができます。

Q 以前と比べて、今の暮らしの良いところは？

A **吉輝さん** 民宿は、人との交流を楽しみ、老後をエンジョイしようと思ってきました。ですから、のんびり経営して行こうと思っています。お金もうけは下手なので、“人もうけ”をしたいと二人で話しています。民宿やカフェは、人との出会いに恵まれます。たくさん人もうけ貯金ができます。コロナ禍以前は外国の方も大勢来られたので、お客様同士が通訳をしてくれたり、みなさんの交流も盛んでした。

瀬戸内国際芸術祭では、鉄工所をしていた関係で現代美術家の大竹伸朗さんのアート作品“針工場”の製作にも関わらせていただきました。大竹さんと記念撮影もさせてもらい、良い思い出になりました。



農作業をする田村さんご夫妻

Q 漁業や農業のここがいい！と思うところや、逆にきついと思うところは？

A **吉輝さん** 漁業は潮次第で魚が獲れたり獲れなかったりするので、お客様に合わせて獲れるわけではないというのが悩みですが、それでも獲れるときには結構良い魚が揚がります。

信子さん 農業は自家消費くらいですが、さまざまな種類の果樹を植えて、季節のフルーツを楽しんでいただけるようにしています。カフェでお出しするフルーツの大半は自分たちが育てたものです。大豆や小豆、ゴマなど新たな作物にも挑戦し続けています。収穫した物で、ジャムや自家製味噌、ケチャップやオリーブオイルなど、さまざまなものを作って楽しんでいます。



この日収穫したイチジク

Q 改めて「半農半X」のライフスタイルの良さと、今後チャレンジしたいことがあれば教えてください。

A **信子さん** イチゴ栽培も良かったのですが、一つのことに根を詰めず、あれこれ楽しめるのが、今の暮らしの良さですね。

吉輝さん チャレンジしているのは、アボカドの栽培です。なかなかうまく行きませんが、いつかは成功させてみせます。子どもの運動会にも顔を出せなかった鉄工所時代と違って、今は「豊島をきれいにする会」で清掃をしたり、壇山の上に展望台を作ったりと、ボランティア活動を行う余裕もあり、島のためにも役立つ暮らしができます。



「カフェ甘香」



民宿でお客様に提供する鯛飯



壇山からの眺め（唐櫃港側）

事例③

目にも静かな島で、まぼろしの唐辛子と心の逃げ場をつくる

丸亀市広島町
農林漁家民宿
「島旅農園『ほとり』」 唐崎翔太さん
(農業+民宿)



令和2年4月、丸亀市広島町に単身移住し、農林漁家民宿の運営とともに、かつて塩飽諸島が産地だった「香川本鷹」の栽培・販売を手掛け、ライターとしても頭角を現す唐崎さんにお話を伺いました。

Q 現在のライフスタイルを教えてください

A 週末を中心に民宿である「島旅農園『ほとり』」を運営。火曜日から木曜日まで丸亀市の臨時職員として働いています（取材時）。農園では、まぼろしの唐辛子と呼ばれる「香川本鷹」を栽培し、販売も手掛けています。また、エッセイやコラムを、クリエイターたちの発表の場となっているインターネットのサイトに投稿しているほか、最近ではライター業にも力を入れています。

Q さぬき広島に移住しようと思ったきっかけは？

A これまでの経歴から話しますと、大阪府摂津市に生まれ、和歌山大学観光学部地域再生学科を卒業後、北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院観光創造専攻にて観光社会学を専攻し、修士課程を修了しました。その後、家具メーカーに勤務するものの上司のパワハラに遭い退社。以前から旅が好きだったので旅に出かけ、祖父のふるさとである丸亀市の広島にも立ち寄りしました。そろそろ、再就職を考えなければという頃に、丸亀市で臨時職員を募集しているという情報を島の人から教えてもらい、その後に声を掛けていただいて、島に住むことになりました。



島旅農園「ほとり」の前で唐崎さん

Q 農家民宿は、移住する前から開業したいという希望はありましたか？

A 島にこだわっていたわけではなく、移住先で宿を始めたいという気持ちが以前からありました。落ち着いて調べてみると、世の中にはパワハラやいじめに遭っている人が随分いて、悩みを抱えながら生きている人が大勢いることを改めて実感しました。そこで、悩みを抱えている人が病院に行く前の段階で立ち寄れる、逃げ場のような場所が必要ではないかと思ったのです。自分の体験からも、そういう場所があれば、どれほど救われるかと



島旅農園「ほとり」外観

思いました。

以前は机にかじりついていたような毎日でしたので、農業の経験はゼロでした。「農家をするぞ」というほど腹を据えて始めたわけではなく、せっかく田舎に帰るのだから家庭菜園でもしようかという軽い気持ちでした。宿をやるなら、自分で作ったものを食べてほしいとも思いました。

「香川本鷹」を栽培したのは、実際に食べておいしいと思ったというシンプルな理由です。ほとんど栽培する人がいないと伺ったので、「消えてしまうのはもったいない」と思うと同時に、単純に「これなら売れるのに」と思いました。ビジネスとして成り立つと予想したわけです。

Q 以前と比べて、現在の農村暮らしの良いところは？

A 改めて思うのは、島では広告をほとんど見ることがないということです。丸亀市街でも大阪でも購買意欲をそそるものがあふれていますが、島にはそれがありません。田舎は静かとよく言いますが、耳に静かなだけでなく、見た目も静かです。目から伝わってくる静けさというものが、現代社会の疲れを癒やすためには必要です。



島と本土を結ぶ江ノ浦港

Q 農業のここがいい！と思うところや、逆にきついと思うところがありますか？

A 植物の種をまいて枯れるまでずっと目で追えることに、感慨を覚えました。「香川本鷹」の場合、春に種をまき、初夏に苗を畑に移し、夏の終わりから年末頃まで収穫します。枯れていった様を見て、農業をやった良かったと思えましたね。最後を見届けて、畑で燃やして、その灰を次の種のために畑にまく。大切な人の人生を見届けたような気持ちになりました。

農作業がきついというのではなく、作業を考えると農作物への経済評価が低すぎます。広大な土地で大量に栽培するか、こだわって高単価栽培をしなければ経済的に成り立たないという農業の現状に疑問を抱いています。



「香川本鷹」の収穫風景

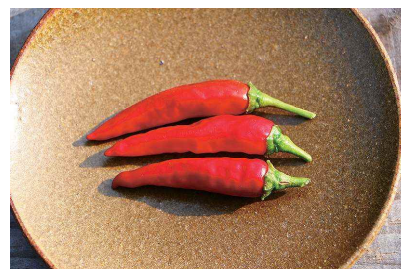
Q 改めて「半農半X」のライフスタイルの良さと、今後チャレンジしたいことがあれば教えてください。

A 「半農半X」という自覚はないのですが、土を触り、自然の花を見るのが元々好きで、「農業をやっています」と身構えなくても、自然に触れる暮らしができるのが良いですね。

今後はライター業などに加え、ライフスタイルやキャリアアップに悩む人々のアドバイザー的な役割を担い、講師の道も模索したいと考えています。



「香川本鷹」で作る油淋鶏、麻婆豆腐



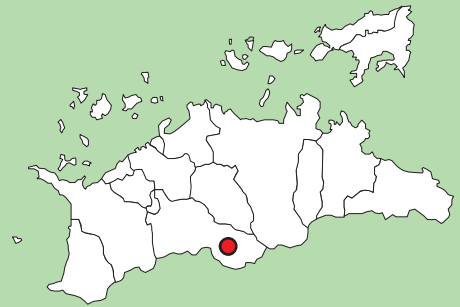
収穫した「香川本鷹」

事例④

七島いで草履づくり 我も人も健やかにする生き方

まんのう町勝浦

「だるまぞうり達麻草履工房」 寺田真也さん
(農業+草履工房)



平成22年、東京都から香川県に移住し、現在はまんのう町琴南地区にある標高約650mの山村に住み「達麻草履工房」を営む寺田さんにお話を伺いました。

Q 現在のライフスタイルを教えてください。

A 畳表などの素材となる「七島い」を育て、草履などの作品を作っています。「七島い」はカヤツリグサの一種で、上質な畳表の材料としても知られてきました。昭和39年の東京オリンピックでは柔道畳として使われましたが、今では大分県のわずかな農家の手でしか栽培されていない貴重な植物です。



「七島い」の田で寺田真也さん

10年前にこの株を手に入れることができ、おそらく日本で唯一、無農薬で育てています。その「七島い」で草履を作り、全国で展示会をしたり、ワークショップを開催したりしています。「七島い」は自宅周辺ではなく、満濃池の近くで約15アール栽培しています。他に米も35アールほど作り、自家消費程度ですが野菜も育てています。また、シイタケ栽培用の原木を切り出し、シイタケや原木の販売も行っています。

Q 琴南地区に移住しようと思ったきっかけは？

A 生まれたのは高松市屋島ですが、中学生の時に父の転勤で東京に住むようになりました。20代の頃に10年ほどバックパッカーをしながら自分を見つめ、生き方を考える時期があり、生涯にわたって自分を支えるものとして、ものづくりをしようと決意しました。それまでは、音楽の世界で生きていたのですが、世界に出れば出るほど日本の良さが身に染み、日本本来の良さを受け継ぐものづくりがしたいと思うようになりました。

子どもの頃から靴が嫌い、裸足になりたくてしょうがありませんでした。靴を履くと体調が悪くなるので、いろいろ調べる内に、草履は本来の歩行に適していることを知りました。草履を履くようになり、体の調子は良いのですが、今度はすぐに草履が傷んで買い換えなければならず、そこに疑問を持ちました。そして出会ったのが驚くほど丈夫な「七島い」



工房での草履作り

の草履でした。

「これを自分の手で作りたい」と、まずは、福岡に住んでいる師匠の元に時折通いつつ、映像で学びながら修業を積み、免許皆伝となりました。本物の素材で作りたいと思いましたが、全く手に入らず、これは自分で育てるしかないと決意しました。「七島い」は種をまくのではなく株を分けて増やすので、一度植えると場所を動かすことができません。そこで、腰を据えて住むなら、ふるさとの香川県に帰ろうと腹をくくりました。帰郷後に結婚しましたが、山で住める土地がなかなか見つかりません。ある日、妻が「琴南」というよいところがあると教えてくれて、来てみると一目ぼれでした。山にこだわったのは、スノーボードをするために2年ほど山にこもったことがあったのですが、その時に山の魅力にとりつかれ、どうしても山で暮らしたいと思うようになりました。



収穫して天日干した「七島い」

Q 山村暮らしや農業のここがいい！と思うところや、逆にきついと思うところがありますか？

A 山で暮らしていると、自分が生きている実感、生かされている感覚をしっかりと味わうことができます。わが家の場合は、薪で風呂を沸かし、山の湧き水で暮らしているので、自然のありがたさを日々感じています。どれだけ自分が楽しみながら手間を掛けられるか、それが山村暮らしの醍醐味です。



「七島い」の刈り取り作業

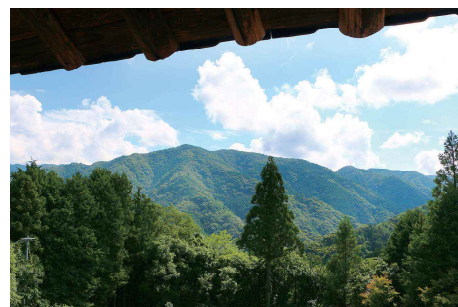
「七島い」も米も暑い時期に農作業をしなければなりません。暑さの質が年々変わってきて、正直、きついと思うようになりました。でも、子育てのように植え始めたときから世話をし、刈り取って、天日干しをし、加工を施し、最後に草履に仕上げたときの達成感は言葉では表現できません。幸福感に満たされ、それまでの苦労はすべて忘れてしまいます。

Q 今後チャレンジしたいことがあれば教えてください。

A 来年春には、工房のある建物の1階に、新たにギャラリーをオープンする予定です。これも新たなチャレンジですが、現在の一番の気掛かりは、草履の編み手さんが目に見えて減少していること。年々、寺や神社からの注文が増え、どこも草履の入手に苦労しています。ワークショップを開催したり、工房に来てもらったり、興味のある人にはどんどん教え、編み方を広めています。その中で、栽培したいという人が出てくれば、株分けもします。多すぎるほどの利点がある草履文化を守るために、チャレンジをしつづけます。



「達麻草履工房」の草履作品

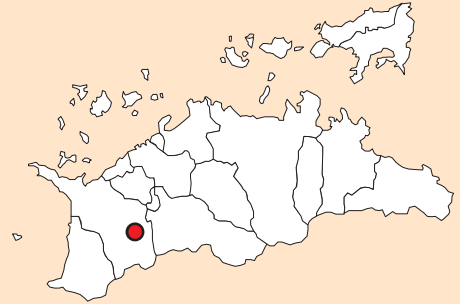


工房の窓から

財田の里山暮らし、“自給農”とカレーづくりでゆったりと過ごす

三豊市財田町

「風凜堂」 永井博之さん
(農業+カレーショップ)



平成28年、東京都から香川県に移住し、現在は農業をしながらスパイスカレーの販売配達を行う「風凜堂」の永井さんにお話を伺いました。

Q 現在のライフスタイルを教えてください。

A 約40アールの田でカレーによく合う米「サリークイーン」を育て、定期的にカレー弁当を販売しています。配達エリアは、三豊市や観音寺市、個数がまとまれば遠方にも配達します。あえて店舗は構えていませんが、時にはイベント会場で店を出すこともあります。



永井博之さん早苗さんご夫妻

Q 財田に移住しようと思ったきっかけは？

A 東京の会計事務所に勤務していましたが、この先このままでよいのだろうかという不安を抱くようになりました。また、食べることが好きだったので、自分で野菜を作ったらどんなに美味しいものが食べられるだろうと思ったのが、最初の動機です。そんな時に、有楽町の交通会館で移住フェアがあり、たまたま香川県のコーナーに立ち寄りました。そこで、いろいろと話を伺い、夏休みを利用して一度香川県を訪れてみようということになりました。この時は讃岐うどんを食べてみたいというのが主な理由でした(笑)。

実際に訪れてみると、とてもものんびりして良いところだったので、香川県に住んでみたいくなりました。荘内半島などは海が美しく移住希望者が多いのですが、僕の場合は農業が目的でしたので、ひたすら里山を探し回りました。中でも財田の地が気に入り、この地にある農家民宿「二升五号」に泊まるようになりました。宿のご主人と一緒に空き家を探してくれたおかげで、空き家バンクで住まいも見付き、平成28年12月に三豊市財田町に移住することになりました。



畑で収穫したタマネギ

Q 移住する前から開業したいという希望はありましたか？また、農作業の経験はありましたか？

A 家が農家だったわけではないので、最初は経験がありませんでした。東京時代に実家がある埼玉県で有名な有機農業を行っている農園などに週末だけ通ってみたり、猫の額ほ

どの区民農園を借りてみたりして、さまざまな有機農業を学びました。

スパイスカレーを作ってみようと思ったのは移住後です。もともと料理は好きで、あれこれ作っていましたが、何をしようかと模索している内に、周囲の皆さんに背中を押され、「無双地図」というゲストハウスのカフェで週一回カレーを販売することになりました。それが、平成29年の9月、娘たちの名前にちなんで「風凜堂」という店名をつけました。残念ながら、新型コロナウイルス感染症の影響でランチの提供が終わってしまい、2年程前から配達専門のカレー店「風凜堂」として営業を続けています。

Q 以前のサラリーマン生活と比べて、現在の農村暮らしの良いところは？

A 自分で全てを決められるところですね。カレーの配達は月に数回と決めて、後はのんびりと暮らしています。休みも自分の判断で取れるのが良いですね。むしろ休日を取るというより、毎日休日で時々仕事と言った方がいいかもしれません（笑）。



カレー弁当

Q 農業のここがいい！と思うところや、逆にきついと思うところがありますか？

A 当初は手植えや手刈りも考えてみましたが、40アールとなると機械に頼るほかありません。現在は、パキスタンの米と日本の米を掛け合わせた長粒種「サリークイーン」を栽培していますが、種もみがなかなか手に入らない貴重な品種で、50粒ほどもらった種もみを3年かけてコツコツ増やしてきました。

自分で作った物を自分で食べるのは、栽培過程も詳細に分かるので100%安心できます。収益を上げようとするとな農業も大変ですが、自分たちで食べる分を育てるくらいなら楽しく農業ができます。いわゆる自給的農業「自給農」です。



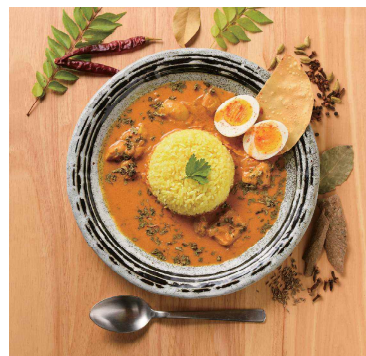
長粒種の米「サリークイーン」

Q 改めて「半農半X」のライフスタイルの良さと、今後チャレンジしたいことがあれば教えてください。

A 田舎の空き家に住めば住宅ローンに追われることもなく、自分で食べるものを自分で作れば、あくせくせず楽に生きていくことができます。自分の手足を動かして土に触って作業をしていると、草取りでも何でも楽しくなってきたり、身も心も癒やされていくのを感じます。そんな暮らしを軸に、住んでいる地域に貢献できることを、無理をせずに行っていきたいと考えています。



すっかり板に付いた田植え風景



スパイスがきいた「風凜堂」のカレー



作成：香川県農政水産部農村整備課
(TEL：087-832-3449・3879)